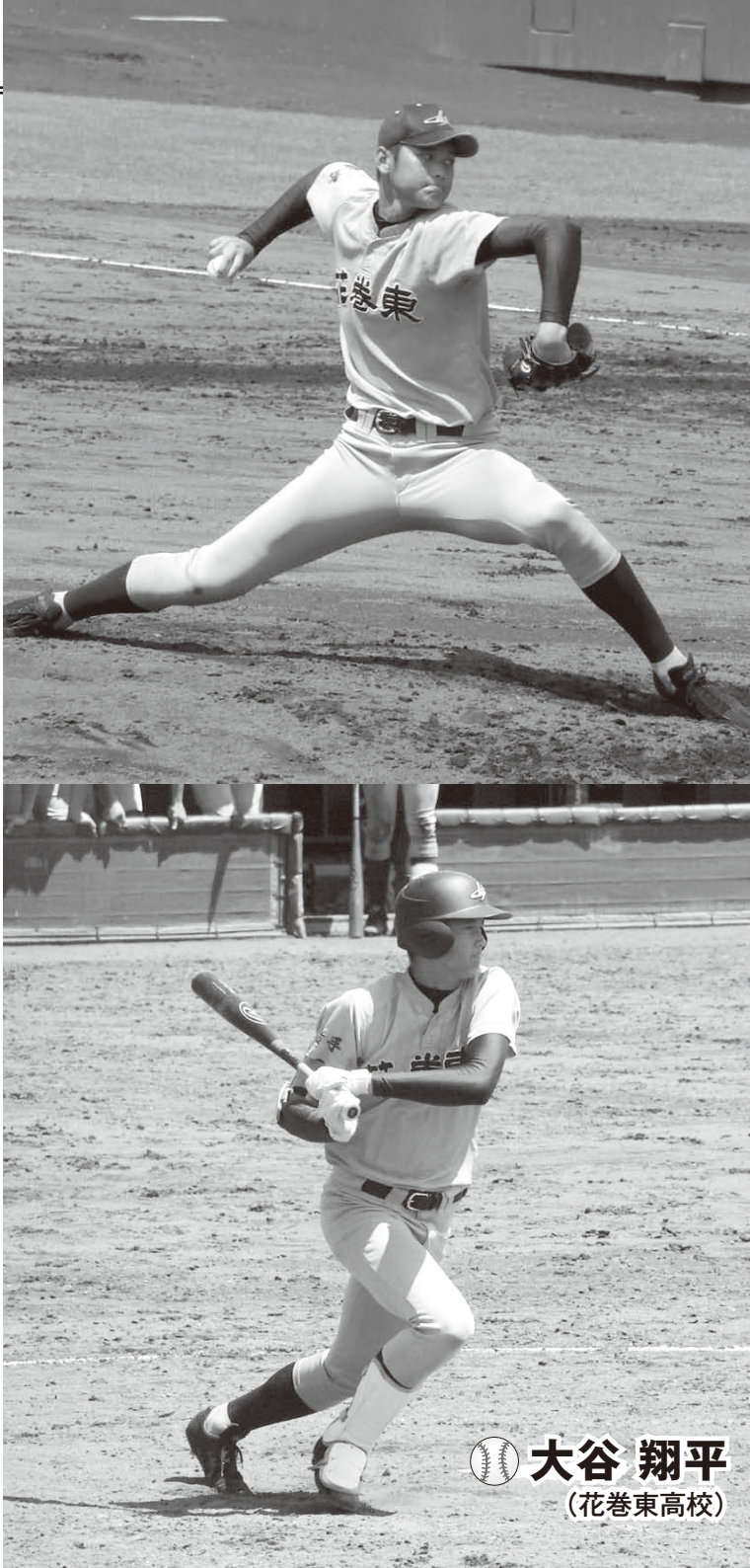




流しのブルペンキャッチャー、野球太郎に見参！ ドラフト候補のピッチングを受け、その体感を記す57歳。初回は今ドラフト最注目逸材高校生右腕を7カ月ぶりに受ける。

稀代の大物右腕を受ける

流しのブルペンキャッチャー、『野球太郎』に見参！ ドラフト候補のピッチングを受け、その体感を記す57歳。初回は今ドラフト最注目逸材高校生右腕を7カ月ぶりに受ける。



大谷 翔平  
(花巻東高校)

## 大谷翔平 (花巻東高) の巻

### 160キロを叩き出し、メジャーを視野に入れる「怪物」

少し前に志望届を出したあとだったから、花巻東・大谷翔平と「プロ野球」との面談はもう始まっていた。

そんなたいへんな時に、二度目の「流し」をせひという厚かましいお願いを聞き届けてくださった佐々木洋監督と流石裕之部長、そして大谷翔平本人に、まず心から御礼を申し上げたい。

誠にありがとうございました。

7カ月ぶりに向き合った投手・大谷翔平は変わっていた。

さなぎから蝶に変身していた。ふっくらと、ほどよい重量感を帯びた均整抜群の体躯。軽く走る姿は、しなやかさとつなぎの柔軟性を保ちつつ、体の内側から筋肉量が増えたように見えるのがうれしかった。

大きくはなったが、ゴツゴツはしていない。腰を割って、グツと沈み込んで投げてくるようになった。角度は春先ほどじゃないが、ボールの勢いがまるで違う。

体重移動できるようになったから、大谷翔平の全身がまずグリーンとこっちに迫ってき

て、そこから猛烈なスピードのボールを叩きつけてくる。

テッカイ唐川(侑己・ロッテ)。投手・大谷翔平はいかにも彼らしくエネルギーが溢れていたが、高校3年生・大谷翔平はさすがに疲れているようだった。

日本じゅうから注目される存在。目の前に近づいてきた進路選択のタイムリミット。すでに、NPB、メジャー各球団との面談も始まっていて、見知らぬ大人たちとの応対に慣れない緊張の場のくり返し。

今日も、日本ハムが学校を訪れていた。会ったの？ と訊いたら、「会っていない」と答えた大谷翔平。

翌日の新聞には、彼に会った印象を語る日本ハムスカウトの談話が載っていた。

「会いました」と言えは、どうする、どうすると根掘り葉掘り尋ねられると思ったのかもしれない。

そんな時に取材に伺ったことを申し訳なく思った。同時に、それでも受け入れてくれたことを改めてありがたいと思った。

NPBか、メジャーか？

彼の胸の内はとくにわかつていない。

訊きたかったのはそんなことじゃない。

高校3年生の秋。

野球、野球で過ごしてきた高校生活のしめくくりの秋を、彼が、一人の高校生、としてどう生きているのか。

訊きたかったのは、そういう話のほうだった。

「9月の29、30日が『東翠祭』っていつて、学校の文化祭があるんです」

クラスで、模擬店を出すそう。

「うどんとか、豚汁とか。学校からお金もらって、自分たちで材料買いに行つて…材料も何と何をどれくらい買つてとか、クラスの人たちとちゃんと相談して」

さしずめ、屋号は「大谷屋」にして、看板娘、はもちろん大谷翔平その人です…。

「いや、自分が前に出ると、いろいろ騒ぎになつたりするかもしれないので…」

ちょっと困つたような、悲しいような。

悪いことを言ってしまった。

「たぶん、奥のほうで調理したり…あんまり目立たないように。自分、学校では自分からしゃべるほうじゃないから、あんまり存在感ないんで」

そうは言っても、一歩外に出れば、花巻





プロからの訪問もあり忙しい最中の取材にも関わらず、笑顔も見せてくれた

チありました。リトルでは、シヨートのほかにピッチャーとセンターもやって、やっぱりいろんなポジションやると、いろんな体の動きができるんじゃないですかね。自分、細か

今は、前で見えきり腕が振れる実感が持てるようになったんで

その通り。  
今の彼の体とフォームなら、普通に投げて

つたし、背が高すぎて動けないこともありましたけど、それだけの体でよくそんなに動けるなあって、今になって言ってもらえるようになったの、やっぱり小・中学校の時にいろんなポジション経験したせいじゃないかと思うんです」

春から夏、そしてこの秋。  
これだけのピッチングの進化は、なぜ生まれたのか。

「左足の付け根を故障してからは、立ち投げでも踏み込んだ前の足(左足)に体重乗せるのが怖かった。それが、徐々に痛みが回復して行く中で、ダンベルを持って体をねじりながら左足に体重を乗せるトレーニングを続けているうちに、いい感じで左足で受けられるようになって。それと同時に、前は軸足がすぐ中に入っていたのが、左足を踏み込んでプレートの上のほうで残れるようになりました。それで、タメも効くようになって、

も40後半、ちょっと本気で腕を振れば、すぐ150キロ台が出たって、ぜんぜん不思議じゃない。  
「故障している時も、地元の人たちがすごくよくしてくれて、ずっと応援してくれてたんです。それがいちばん嬉しかった。ここで…はい…花巻東で、3年間教わったことや、守ってきたことを崩さずにやっていきたいです。はい、あいさつであったり、感謝する心であり…プロに行っても、自分の給料支えてくれるのはファンの人たちだっていうこと、忘れないようにして」

こちらが投げかける質問に、迷ったり、悩んだりしない。サツときれいに答える。

ただし、質問の趣旨にジャストミートしてない答えもあって、想定してない質問には悩んだり、迷ったり、怒ったりしながら答える彼であったなら。

もしかしたら、「取材疲れ」がそうさせたのかもしれないが。

帰路、新幹線の車窓から眺めるみちのくの平野は、もう稲刈りの季節だった。

実りの秋。

岩手・花巻でも、見上げるほどに成長した「あすなるの木」が、まもなくプロの世界に羽ばたこうとしている。

こっちなのか、あつちなのか。

《故障があつて、まだひとシーズン、フルに投げたことのない3年間だったんだから、体を作つて、肩を作つて、花巻東でつかんだ「自信」をこっちのプロで「確信」のレベルに高めて、それから向こうへ行つたって遅くないじゃないか》

そんな、わかつたようなこと、彼に言つて帰ってきた。

しかし、時が経つにつれ、日が経つにつれ、大谷翔平との「最後の数時間」を振り返るにつれ、《ひよつとして、オレは間違つたことを彼に言つてしまつたんじゃないか…》

そんな気がするようになってきた。

春の大谷翔平は「怪物の卵」にすぎなかった。しかし、今、この秋に再会し、再びそのボールを受けた者としての実感は、間違いなく「怪物」であった。

怪物を並の人間の「ものさし」で測つてはいけない。

突き抜けたセンスを持つ者ほど、より高いレベルで輝くものだ。

大谷翔平に会つてみて、彼の

目の中に「NPB」はなかった。

もし、おおかたの不安の声を押し切つてアメリカへ渡つたとして、そりゃあ春から夏はマイナーだろうが、来年の今ごろは、メジャーに上がつてあっさり2つ、3つ勝つて、海

の向こうからこっち見て、あの丸顔で「ほらね」と笑っている。

そんな妄想が、ここにきて、私の頭から離れないのである。

